

キョウトス 決闘事変!!

美甘ネル VS 早瀬エウカ

Blue Archive FANBOOK

ネウオト又決闘事変!!
美甘ネルVS早瀬エウカ

黒ねこ作

表紙・挿絵/しもうみ

登場人物

美甘ネル Cleaning&Clearing コールサイン 00

ミレニアムサイエンススクールの三年生。メイド服の上からスカジャンを羽織ったミレニアム最強のエージェント。ユウカの監視下でブラック労働を強いられる先生を見かねてキヴォトス決闘法による三本勝負を叩きつける。

早瀬ユウカ セミナー 会計

ミレニアムサイエンススクールの二年生。ミレニアムの財政管理担当で「冷酷な算術使い」と恐れられる金庫番。シャーレ当番の古株として、先生の家計簿から書類仕事まで幅広くサポートする。先生のサボり癖に手を焼いている。

先生 連邦捜査部シャーレ 担当顧問

キヴォトスで希少な大人の男性。推定年齢は二十代後半。すべての生徒の味方として、仕事漬けの日々を送っている。面倒な書類仕事を放置しがちで、ユウカに頭が上がらない。仕事のうっかりミスが原因で決闘を見守るはめとなる。

七神リン 連邦生徒会 首席行政官

連邦生徒会の三年生。失踪した連邦生徒会長の代行として、膨大な業務を担っている。ネルに申請された連邦生徒会規則特別条項（キヴォトス決闘法）をとある理由で許可した。

飛鳥馬トキ Cleaning&Clearing コールサイン 04

ミレニアムサイエンススクール一年生。調月リオの失踪後、C & Cに合流した五人目のメンバー。ネルと相対して三度も撃退したが四度目で敗北。和解後はネルを尊敬している。

生塩ノア セミナー 書記

ミレニアムサイエンススクール二年生。セミナーの決定事項や会議を記録する書記。瞬間記憶能力の持ち主で一度見聞きしたことは絶対に忘れない。ユウカの親友で良き理解者。

一之瀬アスナ Cleaning&Clearing コールサイン 01

C & Cの天真爛漫なサブリーダー。天性の直感力がある。

角楯カリン Cleaning&Clearing コールサイン 02

C&Cの優れた狙撃手。後方火力支援担当の調整役。

室笠アカネ Cleaning&Clearing コールサイン 03

C & Cのブレーン担当。掃除と称して爆破する爆弾魔。

才羽モモイ ゲーム開発部 シナリオライター

ゲーム開発部のムードメーカー。ゲーム関連の知識が豊富。



プロローグ	006
第一話 ネヴオトス決闘法	012
第二話 手料理対決!! シャーレの夜食はどっち!?	042
第三話 ネヴオトス最強のメイド! 参戦!!	064
第四話 約束された勝利の象徴	084
エピローグ	124
あとがき	132

プロローグ

日曜日。D・U・シラトリ区は学生で賑わっていた。

カフェにファミレス、コンビニやゲームセンターの店内も、暇を持て余した生徒の姿でごった返している。制服の脇や腰に銃をぶら下げて、他愛のない雑談に花を咲かせる。

キヴォトスのありふれた週末だ。大勢が注目するライブ配信を除いては――。

《クロノス報道部所属、アイドルレポーターの川流シノンです！ 注目の決闘もいよいよ大詰め！ 勝利を掴むのはどちらでしょうか！ バトルの行方はいかに!?》

スマートフォンや店のテレビ、商業施設の大型ビジョンに報道ヘリから撮った市街地の映像が映っている。不良の生徒すら寄りつかないゴーストタウン。薄汚れた廃墟の街中で銃声が連続して轟く。突如、商業ビルの七階が爆発した。外壁と窓ガラスが吹っ飛ぶ。

人影が立ち込める粉塵を抜けて空中に躍り出る。

「……ハッ！ やるじゃねえか、会計！」

メイド服の上から羽織ったド派手なスカジャンが目を引く少女だった。ショートヘアの鮮やかな朱髪しゆはち。高校生としては小柄な体躯でサブマシンガン二丁を握っている。

容赦のない速射が粉煙を切り裂く。落下する破片を踏み台に使い、少女は常人離れした跳躍で銃火を跳び避ける。頬を擦った弾丸に怯むどころか見向きもしない。

最後の瓦礫を蹴りつけて、

「急かすなよ！　すぐに終わらせてやる！」

黄金の龍と桜の文様を刻んだ「ツイン・ドラゴン」のフルオートで撃ち返す。空葉莢をばらまきながら、勢いよく踏みつけた路面に派手な亀裂を入れて着地した。

《美甘ネルが余裕で猛攻を退けました！　ミレニウム最強は伊達ではありません！》
「当然だ。あたしを誰だと思ってる」

二丁の弾倉を交換して頭上のへりを睨む。

小バエみたいな鬱陶しさだ。何発か撃ち込んで「掃除」してやろうか？　脳裏にそんな考えがよぎったものの、この配信を見ている先生の実在を思い出して踏み止まる。

シノンが熱の入った実況を一带に響かせた。

《ですが、早瀬ユウカはまだ健在だ！　セミナーの底意地でしょうか！　圧倒的な強者を相手に無傷で善戦しています！　どちらが勝者となるのか目が離せません!!》

すみれいろ
薔色の長髪をツースайдアップにした少女——早瀬ユウカが厳しい表情で階下のネルを見据えていた。黒を基調としたブレザーとミニスカート。ミレニウム公式の白いアウトター

ジャケットを羽織った彼女は、ハーフグローブを着けた両手に愛銃を握っている。

——ロジック&リーズン。ユウカの合理と理性を司るネルと同型のサブマシンガンだ。

「へえ、無傷かよ。偶然にしちゃ大したもんだ」

ユウカの眉根がピクリと跳ねる。通信機を介して否定した。

『偶然？　いいえ……』

パラパラと足下に潰れた鉛が転がる。9ミリパラベラム弾の残骸だ。

『計算通りです。ネル先輩』

ロジック&リーズンの銃口がマズルフラッシュで彩られる。

ネルは瓦礫だらけの道路上を駆けた。彼女の行く手を阻むように銃撃がアスファルトを切り刻む。ユウカの射撃に無駄はないが、疾走する彼女を捉えられる弾丸はない。

『すばしっこいわね！　やっぱり面積が小さいと狙いが——』

「おい、誰がチビだコラッ！　ぶっ飛ばすぞ!!」

回し蹴りで横転させた廃車で銃火を防ぐ。銃声が止んだ隙間を突いて、腰だめに構えたツイン・ドラゴンを猛射する。小細工なしの集中砲火がユウカに襲いかかった。

「おらおらおらおらあっ!!」

ホローポイントの苛烈な弾雨だった。

拳銃弾のストッピングパワーは馬鹿にならない。ヘイローを持つ生徒で換算すると拳で滅多打ちにされるようなもので、二丁で六〇発も叩き込めばダメージはそれなりだ。

アザだらけで失神しても不思議はない。当然、もろに食らえばの話だが。

「……ちつ。マジでバカみたいに頑丈だな」

硝烟がなびく銃口を下ろした先で、ユウカはかすり傷もなく平然と立っている。

『——証明完了。計算は完璧。何度やっても同じよ』

ユウカの全身は透明な球体に包まれていた。類い稀な計算能力で構築した論理防壁で、あらゆる攻撃を阻む物理干涉シールド。彼女が「O.E.D」と呼んでいる切り札だ。

このシールドがある限り、有効なダメージを与えることは難しい。

ネルは空のマガジンを足下に落とした。

(めんどくせえなあ……)

波つ面で差し込んだ弾倉から薬室に弾を送る。

シノンの大げさな実況が場を煽った。

《ミレニアム最強の美甘ネル！ 予想外の苦戦を強いられています！ 申し込んだ決闘に破れて負け犬となるのか！ セミナーに叛逆したメイド部の明日はどっちだ!?》

ユウカが両目を細めた。愉快そうに口角を上げる。

『……だそうですよ？ ネル先輩』

「ふざけんな！ ぶちのめされてえのか!？」

怒り顔で上空に発砲する。報道ヘリが慌てて距離を空けた。

『ちよつと何やってるの!? 墜落したら弁償よ!』

「ああ!? ビル一棟に比べりゃマシだろうが!」

『そういう問題じゃないわよ！ 破壊行為の請求書を今よりも増やさないでください！

この決闘に負けたら、C & Cが全額弁償するのよ!』 過去の修繕費も全部!』

「心配ねえよ。負けたら、だろ?」

ユウカが盛大な溜息をつく。頭が痛いと言いたげな顔だ。

『……いいわ。それなら耳を揃えて払ってもらおうわよ!』

「お前が勝ったらな！ ただ、負けたらわかってるよな?」

『……っ』

言葉に詰まるユウカを見据え、ネルが凶悪な笑みを浮かべる。

「あたしらC & Cがシャーレ当番を独占する。先生の専属メイドだ」

『ネル先輩が勝てたらですよね?』

「ああ?」

睨み合う両者は一步も引かない。目に見えない火花を散らしている。お互いに譲れない大切なモノを賭している。絶対に負けられない。意地でも勝つしかない。すべては――。

（――先生のために！）

ほぼ同時だった。二人が構えた銃のトリガーを引く。発砲炎の明滅に合わせて、荒廃した街路に9ミリの弾丸が飛び交う。激しい銃火の応酬が廃墟の壁に無数の弾痕を穿った。

ユウカは半壊したフロアから弾幕を張る。

「計算通りよ！ 攻撃が私に命中する確率は……極めて低い！」

ロジック&リーズンを撃ちまくる。相手の頭上を押さえる制圧射撃。息をつく間もなく吐き出される銃弾が、瓦礫を蹴り飛ばして強引に前進するネルに高速で迫った。

「ははっ!! 無駄なんだよ！」

銃撃を縫うように躲しつつ、ネルは不敵に笑んで突き進む。

二つの影が荒れ果てた都市でぶつかり合う。決闘はどちらかが倒れるまで終わらない。

美甘ネルと早瀬ユウカ。二人が争うに至った発端は三日前へ遡る。

それは、シャーレの近場にある公園で起きた些細な事件だった。

第一話 キヴォトス決闘法

1

水曜日の午後。

ネルはベンチにどかっとな腰を下ろした。

「……ったく、売り切ればっかでロクなもんがねえな」

仏頂面で片手に提げたコンビニの買い物袋を脇に置いた。

昼のピークが去ったコンビニの陳列棚に残る商品は少ない。おにぎりやサンドイッチ、弁当の九割は買い尽くされた後で、ホットスナックも唐揚げ串が残り一本だった。

めばしい飲食店は仕込みで準備中の札を掲げている。選択肢はなかった。

(まあ、こんな時間まで寝ちまったしな……)

一息つける場所を求めて入った公園は閑散としていた。D・U・シラトリ区の外郭に近い立地も相まって、昼休みの終わった今は見かける人影も疎らで平穏そのものだ。

ふわあ、と堪えきれない欠伸で口を大きく開ける。

眠気を誘うような暖かい陽射しが、徹夜仕事で寝不足な身体に効いていた。

「はあ……雇われも楽じゃねえなあ」

思い出すのは昨晚、見慣れた番号からの着信だ。

——『お疲れさまです、ネル先輩。今どちらですか？』

電話口の相手は、早瀬ユウカ。ミレニアムサイエンススクールの生徒会“セミナー”の役員の一人で、同校の財政支出に頭を痛める日々を送る金庫番もとい会計であった。

盛大な溜息をつき、ユウカは苛立った声で続ける。

——『C & Cに急ぎの依頼です。また、エンジニア部の倉庫に強盗が……』

最先端科学に溢れるミレニアムで事件は日常茶飯事だ。開発中の試作品が暴走、実験の失敗による事故は珍しくもないが、表沙汰になると少なからず厄介なトラブルもある。

だからこそ、セミナーは直属に『Cleaning & Clearing』を抱えている。

秘密組織C & C。ミレニアムの厄介事を綺麗に掃除する腕利きのエージェント集団だ。

普段からメイド服を着用するメンバー全員が荒事のプロ。ミレニアムでトップクラスの戦鬭力を持ち、美甘ネルを部長に据えた「メイド部」として表向きは通っていた。

ネルは辟易とした面持ちでばやく。

「アイツらの倉庫に武装強盗^{タダキ}って……これで何回目だよ。六回か？」

エンジン部^ニの倉庫には、膨大な発明品が放り込まれていた。

ロマンと趣味を突き詰めた高性能なガラクタから、危険すぎて封印された試作品まで。部長の白石ウタハを始めとする天才達の作品が山ほど保管されているのだ。

おかげで何度も強盗に入られている。セキュリティの穴を突いて中身を盗まれるたび、C & Cはセミナーの依頼で強奪された品々を一つ残らず回収してきた。

今回の強盗は大胆だった。装甲車で倉庫の壁に突っ込むと、二分で積めるものを奪って、爆弾を置き土産に逃走。殺到する警備ドローンを吹き飛ばして追跡を振り切った。

スクラップ送りの警備ドローンは三桁、爆弾の爆轟波で倉庫も半壊。強奪された一部に特許申請中の発明品もあったらしく、模造品が市場に出回ったら数百億の大損失だ。

ユウカが被害総額を試算してキレるのも無理はない。

——『実行犯の処理はお任せします。盗まれた発明品は今回もすべて回収してください。

壊さないでくださいね？ 絶対ですよ？ これはフリじやありませんからね？』

大がかりな強盗に必要なものが二つある。

道具や頭数を揃える金と奪った盗品を捌く故買ルート。あちこちに声をかけたらしく、実行犯のアジトは簡単にわかった。問題は加担した人数が思いのほか多すぎた。

「……無駄に頭数を揃えやがって。結局、朝までかかったじゃねえか」

ネズミ算式に増える悪党の増援を掃除したのち、ラグビーみたいに盗品をパスしながら逃げ回る実行犯を全員始末して、ミレニアムに盗品を持ち帰ると夜が明けていた。

帰宅後はベッドに直行して、目を覚ますともう昼過ぎである。出席日数の心配はあるが、これから授業に出ても寝落ちするだけだ。それなら開き直ってサボるしかない。

「まずは腹ごしらえだ」

胃が空腹を訴えている。昼飯はもとより朝食もまだであった。

ガサガサと袋を漁って気がついた。飲み物を買ったようにツナサンドと惣菜パン、唐揚げ串しか入っていない。幸い、ベンチのすぐ近くに自動販売機があった。

「お、ラッキー」

スカジャンのポケットからスマートフォンを出して腰を上げる。

ホットとアイスの飲み物が半々のラインナップだ。ペットボトルの紅茶と缶のココアで迷ってから、アイスココアのボタンを押した。近づけたスマホで支払を済ませる。

——ガンツ！ ドゴンツ！！

自動販売機が前後に揺れ動いた。

「なんだ、今の？」

取出口に落ちたのは飲料缶が一本。だが、聞こえた音は鈍重でもっと大きい。

怪訝な表情で自動販売機の裏をそつと覗き込む。

「……は？」

見覚えのあるシルエットが倒れていた。千切れた雑草が絡まった癖のある跳ねた黒髪、くたびれた灰色のスーツは砂埃にまみれて、やつれた顔で気絶する大人の男――。

首から提げた身分証に「独立連邦捜査部^{独立連邦捜査部}」の文字とヘイローのエンブレムがある。

「な、何でこんなところに倒れてんだよっ!? 先生!!」

大慌てで駆け寄って先生の体を起こした。首筋に触れて脈を確かめる。

「……息はしてるな。おい、しっかりしろ! 先生!」

両肩を掴んで何度も揺ると、

「うっ。痛てて……」

「大丈夫か、先生! 怪我は? 動けるか?」

意識の戻った先生が小さく頭を振る。

「……ネル? 学校は?」

「最初に聞くのがそれか!? 心配することが他にあるだろ!」

「でも、この前も出席日数がギリギリだって……」

「あたしの出席日数はどうでもいいんだよ！ 自分の身体を心配しろ！」

半ギレで言い返しつつも安堵する。こんなボロボロの状態で倒れていたのだ。どこかで手荒な扱いを受けて命からがら逃げて来たのだろう。冷静になるにつれて頭にきた。

「誰にやられた？ あたしがきっちり落とし前をつけてやる！」

「……違うんだ、ネル。誰かにやられたわけじゃなくて……」

先生が擦れた声で説明する。

「書類を渡しに行った帰りに……その、ふらつと足を滑らせてね……」

シャーレのオフィスは公園からそう遠くない。道路までは急な斜面となっているので、ガードレールを越えて転がり落ちたなら、ボロ雑巾じみた姿になるのも当然だった。

「……仕事が終わらなくてさ。今日で五日徹夜してるから……」

「寝不足でぶっ倒れたらコケて転がってきた……？」

ネルが握った拳を小刻みに震わせた。げっそりした顔で頷く先生を睨みつけて、

「倒れるまで働くんじゃねえよ!! ちったあ身体を労れバカ野郎！」

公園に怒声が響き渡る。カラスやスズメが驚いて一斉に飛び立った。

「……面目ない」

先生が申し訳なさそうに目を伏せる。ぎゅるる、と腹が鳴った。

「おい、先生……」

「……ごめん。昨日から何も食べてないんだ」

2

「うっ、うう……美味しい。ツナサンドがこんなに美味しいなんて……」

ツナサンドを頬張ってベンチで涙する先生。空腹だとコンビニの売れ残りも高級料理に思えるらしく、惣菜パンと唐揚げ串を「美味しい！」の連呼で早々に完食していた。

隣でその様子を見るネルは、困惑と呆れの入り混じった表情を浮かべる。

「……そりゃよかったな」

「本当だよ？ 久しぶりに美味し、んぐっ!？」

「ほら、これ飲めよ」

青ざめた顔で胸を叩く先生に、開けたばかりの缶ココアを手渡した。

「……ふう。助かったよ。死ぬかと思った……」

「シャレになんねえよ！ いいから、ゆっくり食え！」



後ろ頭を搔いて笑う先生を、ネルは軽く睨んで溜息をつく。

肩を貸してベンチに座らせた時と比べて顔色は良くなったものの、食事で回復したのは血糖値ぐらいだろう。明るく振る舞ったところで、疲労の濃さは誤魔化せない。

（忙しいってのはわかるけど……どんな生活してんだよ）

キヴォトスには学園が巨万とある。生徒数や規模は違えども、学園ごとに様々な問題を抱えている。だが、生徒が頼れる「シャーレの先生」は目の前にいる一人だけだ。

シャーレに寄せられる相談は膨大だ。ましてや、先生は「すべての生徒の味方」を信念に動いている。生徒の相談内容に大小の区別をしない。激務による過労は必然だった。

ただし何事も限度がある。ブラック労働で倒れては元も子もない。

ツナサンドも食べ終わった先生が、人心地ついた顔で両手を合わせた。

「ごちそうさまでした！ はぁ、生き返った。ありがとう、ネル」

「おう、飯はちゃんと食えよ。腹ごしらえは大事だぜ」

「あはは……でも、全部食べて良かったの？ これ、お昼ご飯だよな？」

「コンビニで適当に買ったもんだ。気にすんな」

「そう？ それじゃ代金だけでも……」

「別にいらねーよ。ただ、次にぶつ倒れても助けねえぞ」

先生が相好を和らげる。口元に微笑を湛えた。

「ネルは優しいね」

「はあ!? 何でそうなるんだよ!」

「次は倒れる前に呼べてことでしょ?」

「違っ、だからその……ああもう! とにかく次はないからな!」

紅潮した顔を背けて、ネルは今さらなツツコミを入れる。

「つーか、五日も徹夜すんな! ぶっ倒れて当然だ!」

「いつもじゃないよ? たまたま急ぎの仕事が何件も重なっちゃって……でも、みんなの相談に乗るのも大切だからね。気がついたら、書類の提出期限が大変なことに……」

「……当番のヤツは何やってたんだ? 普通は気づくだろう」

先生の負担を軽減するために、シャーレには当番制で業務を手伝う生徒がいる。

いわゆる「シャーレ当番」と呼ばれる補佐役だ。先生の指名で選ばれるケースが大半で、当番制を原則としているが、得意分野によっては半ば固定化している生徒もいた。

先生がやんわりとフォローした。

「当番のみんなは頑張ってるよ。ただ、私のタスク管理が下手なだけでね……」

苦笑を湛えてから、彼は教え子を安心させようと続ける。

「心配しなくても大丈夫だよ、ネル。私は先生だからね。大切な生徒の助けになれるなら、大変な仕事だってへっちゃらだよ。ネルも困ったら遠慮なく頼ってね」

「さっき腹でこで地面に転がってたよな？」

「……それは忘れて欲しいかな」

明後日の方角を見ている先生の隣で、ネルは肩を竦めて両腕を組む。

「話せよ、先生。ちゃんと聞いてやるから」

「えっ？」

「ガス抜きってやつだよ。たまには必要だろ」

ぶっきらぼうに付け加えてから、気恥ずかしさを覚えて目を逸らす。

先生が生徒に心の内をすべて喋るとは思わない。だが、些細な話のひとつやふたつなら聞けるかもしれない。一人の生徒の立場でも、その話に付き合うくらいはできる。

「うーん？ 気持ちは嬉しいけど……」

「何もねえのか？ 食いたいもんとか、欲しいもんとか」

小難しい表情で考える先生が膝を打った。

「書類仕事で終わらない休日が欲しい」

「休みの日まで仕事すんなよ！ 休めよ！」

「じゃあ、定時帰宅かな。日付が変わっても帰れない毎日だからね」

「働き方がブラック過ぎるんだよッ!! おかしいだろうが!」

「バリバリと頭を掻き筆ると、ネルは意を決した面持ちで立ち上がる。

「おい、困ったら頼っていいんだよな?」

「もちろん。どんな些細なことでもね」

「はっ、そりゃ良かった。特大の困りごとだからな」

きよとんとした先生の右腕を掴む。ニヤリと口端を吊った。

「付き合えよ、先生。あたしが自主休暇の取り方を教えてやっから」

「それはサボりって言うんじゃない?」

「ああ? 何か言ったか?」

ギロリと睨まれた先生が左右に頭を振る。

「ったく、ほらさっさと行こうぜ。まずは飯だ。行きつけの店があるんだ」

先生の腕を引いて立たせたときだ。

頭上に複数の影が差した。

「なんだ?」

思わず顔を上げたネルは、空中に浮遊する円盤を睨みつける。

某お掃除ロボットを思わせる白いボディの量産型ドローン。普段はミレニアムの校内を警備する飛行型だった。四機がこちらを包囲して滞空する。機体の下部にガトリング砲が二門あるものの、敵意は微塵もないようでロックされたまま動き出す気配もない。

先生の顔は心なしか青ざめていた。無理もない。非武装の先生は丸腰だ。一発の銃弾でも致命傷となる。後ろ腰に手を回したネルは、愛銃を抜く寸前で顔見知りの姿を認めた。

黒い制服の上から、白のアウトージャケットを羽織った少女が走って来る。

「せーん！せーん！せーん！」

先生が油の切れたブリキ人形のようなぎこちなさで振り返った。

「ゆ、ユウカっ!? どうしてここに……」

「探しましたよ！ こんなところにいたんですね！」

驚愕に目を見開いた先生が後退る。ツーサイドアップでまとめた菫色の長髪を揺らし、シャーレ当番の常連——早瀬ユウカがタブレット端末を片手に詰め寄った。

「帰りが遅いと思ったら！ ここでサボりですか？」

「違うよ!? えっと、ほら！ ネル！ ネルの相談に乗ってたんだよ！」

「ネル先輩の？ 本当ですか？」

「本当だよ！」

疑いの眼差しを向けるユウカを、ネルは睨み返した。

「何だよ？ 文句あんのか？」

「……いいえ。ネル先輩、疑ってすみませんでした」

「あれ？ 私は？」

ユウカは先生の左腕をガッチリと掴む。笑顔で圧をかけた。

「シャーレに戻りますよ？ お仕事はたっぷり残ってますからね？」

「えっと、ユウカ！ 実はこれからネルと約束があつて……」

「ダメです！ まだ八十二件も書類が残ってます。提出期限は昨日ですよ！ 今日提出は九十二件もありますからね？ ちゃんと期限を守ってください。いいですね？」

「……はい。申し訳ありません」

完璧な正論で叱られる先生はすっかり小さくなっている。

ネルが鋭い視線でユウカを睨めた。

「おいコラ！ 勝手に決めんじやねえよ。あたしの用件は後回しか？」

「どんな用件ですか？ ネル先輩」

「どんなって、そりや……い、色々だ！ 別に関係ねえだろ！」

「関係ありますよ。先生の業務が滞るのは当番として看過できないわ」

「たかが書類で大げさなんだよ。気合い入れりやすぐ終わるだろ」

「ネル先輩、昨晚の報告書はまだですか？ 後輩任せにしますよね？」

「う、うっせえな！ 別にいいだろ！」

「よくないわよ。たまには自分で書いてください」

ぴしやりと反論を封じたユウカは、先生のスーツの後ろ襟を掴んだ。

「さあ戻りますよ、先生！ サボってる時間はありませんから！」

「ネル、ごめんね！ 埋め合わせは今度するよう！」

引き摺られて行く先生を、ネルは釈然としないまま見送るしかなかった。

3

夕方。部室に顔を出したネルは、誰が見ても不機嫌だった。オフィスチェアの背もたれに身を預けると、デスク上に投げ出した両足を組んで、険悪な顔で天井を睨みつける。

（……クソッ。うざってえことぬかしやがって……）

昼の一件が脳裏にちらついてイライラする。ユウカの正論を振りかざした強引な態度も気に入らないが、彼女に終始言われっぱなしで従っている先生にも腹が立った。

すべて自分が悪い。そんな態度が余計にムカついた。

「ちっ……」

無意識に漏れる舌打ちが、ネルの刺々しいオーラに拍車をかける。

C & Cのメンバーには見慣れた光景だ。唯一、とある事情から最近までは別行動だった五人目のエージェント——コールサイン「ゼロフォー」の飛鳥馬トキを除いてはだが。

応接セットのソファアームに座る姿は西洋人形を彷彿とさせた。英吉利結^{イギリス}びで束ねた金髪とやや表情に乏しい端正な顔立ち。澄んだ碧眼で先輩の様子をじっと見つめている。

「何かあったのでしょうか？ ネル先輩」

コールサイン「ゼロツー」の角楯カリンが対面で顔を上げた。

紫がかった長い黒髪と褐色肌に琥珀の双眸。キリツとした目つきでガンオイルの染みた布を手にする彼女は、愛用の対物スナイパーライフル「ホークアイ」の整備中だった。

カリンはトキの目線を辿って理解する。

「ただの寝不足じゃないかな？」

「なにになに？ トキちゃん、部長が気になるの？」

一之瀬アスナが二人の会話に割り込む。コールサイン「ゼロワン」のアスナは、ネルに次ぐ実力のベテランだ。ミルクブロンドの長髪と切れ長な水色の瞳で、グラビアモデルも

羨むプロポーションの彼女は、天真爛漫な性格かつ振る舞いも自由奔放であった。

現にソファアの後ろから両腕を回し、困惑するトキの頭を抱きしめている。

「あの……いえ。アスナ先輩はどう思いますか？」

「うーん？ お腹が空いてるとか？」

「どうだろう？ それなら外で食べて来ると思うけど」

「あつ、わかった！ 誰かとケンカしたのかも！」

「リーダーと？ 相手が無事じゃないだろう」

「もお、カリン！ 私ばかり不公平だよ！」

「……そう言われてもな。私もわからない。先生なら別かもしれないが」

黙って聞いていたトキが、ぽんと手を打った。

「わかりました。先生ですね」

「ご主人様が関係あるの？」

「ネル先輩の機嫌を損ねて無事で済むような人物が他にいるのでしょうか？」

「……筋は通ってるな」

「えー、ご主人様とっても優しいよ？ 部長を怒らせたりするかな？」

「例えば、先生と出かける約束をしていたら？ どうでしょう？」

「ご主人様とデートってこと？」

カリンが腑に落ちた表情で頷いた。

「そうか。先生に約束をすっぱかされて……」

「はい。ネル先輩が機嫌を損ねてしまうのも無理はありません」

「そっかあ。ご主人様にフラれたらショックだよな」

「……ああ。今はそつとしておこう」

同情を湛えた視線を送る三人。ネルは両肩をわなわなと震わせた。

「お前らなあ——」

真っ赤な顔で立ち上がると、怒髪天を衝く勢いで怒鳴る。

「さっきから好き勝手言いやがって！ 全部聞こえてんだよっ!!」

「落ち着いてください、ネル先輩。キレてもフラれた現実が変わりませんよ」

「お前だろうが！ 的外れな話を始めたのはッ！」

「心外ですね。私の推理は完璧ですよ？」

「全っ然！ 一つも！ 合ってねえッ！」

「違うのですか？」

「当たり前だバカ！ ふざけんな！」

「はあ……紛らわしいですね」

顔に青筋を立てたネルが、やれやれと頭を振るトキに近づいた。

「……おいコラ、新人。よっぽどぶっ飛ばされてえみたいだな？」

「見損ないました、ネル先輩。可愛い後輩を殴って気を晴らすつもりですね？」

「もう、トキちゃんをいじめちゃダメだよ！」

「そうだな。誰にでも間違いはある」

「うがぁーっ！ 何なんだよお前らっ！ あたしをからかってそんなに楽しいか!？」

ダンダンツと紅潮した顔で地団駄を踏む。その姿は駄々をこねる子供そのものだ。

「部長？」

「あぁッ？ んだよ！」

振り返ったネルに微笑を返し、室笠アカネが書類とペンを差し出した。

「昨晚の報告書です。回収品リストの確認もお願いします」

「……おう。ありがとよ」

バツが悪そうな顔で受け取ると、クリップ留めされた紙に目を走らせる。

コールサイン“ゼロスリー”のアカネは、爆発物の専門家でC&Cのブレーン担当だ。

オーバル型の黒縁眼鏡を掛ける彼女は、アスナやカリンとも並ぶ抜群のスタイルを持ち、

甘栗色の長髪は緩くウェーブがかった。柔らかな笑みを湛えてネルを見守る。

「……筋力超増強シューズに双方向投影コンタクト？　ったく、こんなガラクタの回収に徹夜させられたのかよ。バカバカしくて怒る気にもなりやしねえ」

最後のページにサインを入れて、ネルは書類を返した。

「問題ねえよ。さっきは悪かったな」

「気にしないでください。先生にフラれたら落ち込むのも当然ですからね」

「だ・か・らっ！　違うって言ってんだろうが！」

「ふふっ、冗談ですよ。本当は何があったんですか？」

「ちよっとイラついてただけだ。別に大したことじゃ……」

「部長？　私たちでは力になれませんか？」

アカネが悲しそうに眉尻を下げた。アスナやカリン、トキにも見つめられる。

バリバリと頭を掻いたネルは、疲れた表情で両肩を落とした。

「……ったく、わーったよ！　ちゃんと教えりゃいいんだろ！」

公園で起きた出来事を掻い摘まんで喋る。ブラック労働で倒れた先生、連れ戻しに来たユウカの腹立たしい正論——四人とも表情は違っても似たり寄ったりな反応だった。

アスナは目を丸くする。

「えーっ！ ご主人様、五日も徹夜してるの？」

「先生が多忙なのは知ってたけど……」

言葉を濁したカリンに代わって、アカネが困惑した表情で続ける。

「……先生のお身体が心配ですね」

「あたしらも色々と面倒かけてるからな。何か力になってやりたいけど……」

悔しそうに拳を握ったネルを見つめ、トキが小さく手を挙げた。

「ネル先輩」

「ん？ なんだよ？」

「先生をシャーレから誘か……お連れして保護してはどうですか？」

「今、誘拐って言おうとしたよな？」

「人聞きが悪いですね。あらゆる障害を排除して連れて来るだけですよ」

「それじゃ拉致だろバカ！」

アスナが元氣よく手を挙げて跳ねる。

「はいはい！ じゃあ、私たちがシャーレに引っ越すのはどう？ ご主人様にいつも

ご奉仕できるから安心だよね！」

「……なるほど。先生の警護も出来て一石二鳥だな」

「なるほどじゃねえよ！ アスナ、カリン！ お前らもなに言ってるんだ！」

怒濤の勢いでツツコミを入れるネルを、アカネが柔らかな眼差しで宥めた。

「先生にご奉仕する。これは悪い案ではないと思いますよ？」

そう言っ、彼女は眼鏡のつるを指先でクイツと押し上げる。

「部長、連邦生徒会規則の特別条項を知っていますか？」

「知らねーよ」

「——キヴォトス決闘法。連邦生徒会の規定に従い、当事者が代理人が同じ条件で戦って勝った側を争乱の勝者とする。キヴォトスで紛争を解決する法制度の一つです」

「……保安部で聞いた覚えがある。でも、本当にそんな制度があるのか？」

アカネは怪訝な面持ちのカリンを見ながら、

「連邦生徒会のサイトに載っていますよ。まあ疑うのも無理はないですね」

「あ？ 何だよ？」

「使われた事例がありませんから。過去に一度も……」

銃を持たずに歩くのは、裸で外を歩くようなものとは誰が言ったのか？

武装所持と携帯が当たり前のキヴォトスでは、些細な喧嘩ですら銃撃戦に発展するなど日常茶飯事だ。わざわざ申請をしなくても、治安を乱さなければ果たし合いはできる。

ネルが鼻を鳴らした。

「……んだよ。期待させやがって」

「あらあら、最後まで話を聞いてくださいね。キヴォトス決闘法で勝者は、連邦生徒会長の権限で紛争の結果を決める権利が保証されます。ここまで言えばお分かりですね？」

「あたしにシャーレ当番を賭けて会計と戦えってか？」

「ユウカも規則には逆らえませんか。キヴォトス決闘法が適用された例はなくても、制度は有効ですから申請もできます。部長、私の案はいかがですか？」

わずかな沈黙を経て、ネルはニヤリと口端を吊った。

「……悪くねえな。ダメ元でやってみるか」

4

「ふあ……」

窓辺で西日を浴びながら、ネルはデスク上に足を載せた普段の体勢で欠伸を漏らした。これといった依頼や任務もなく、平穏で退屈な一日が終わろうとしている。

ティーカップを載せた受け皿が置かれた。アカネが自分のカップを手を微笑む。

「どうぞ、部長」

「サンキュー」

ダージリンの華やかな芳香が鼻腔をくすぐる。

淹れ立ての紅茶で唇を濡らした。温度、味ともに非の打ち所がない。

「あの申請はどうなった？」

連邦生徒会に申請して早二日。アカネに手続きを任せてある。

アカネは受け皿にカップを戻して領いた。

「無事に通りました。クロノス報道部の号外が先ほど出たそうです」

「相変わらず耳が早えな。つーことは、そろそろか？」

「ええ、そろそろですね」

ぐいっと飲み干したカップをアカネに返した直後だった。

ノックもなしで部屋のドアが乱暴に開かれる。

「ネル先輩！ ちょっとお時間いただけますかッ!!」

肩で息をするユウカがネルを睨む。デスクに足音荒く歩み寄る彼女は、先生すら裸足で

逃げ出しかねない怒りの形相だ。ゲーム開発部がラスボスに選ぶのも無理はない。

眼前のユウカを見上げ、ネルはニヤリと笑んだ。

「よお、会計。どうしたんだよ？」

「どうしたじゃないわよ！」

さらに一歩踏み込んだユウカが、ネルの鼻先に紙面を突きつけた。

「これよ！ どういうことか説明してください！」

クロノススクール報道部の号外だ。カラフルなゴシック体の見出しが踊っている。

【セミナー存亡の危機か!? ミレニウム最強の生徒・美甘ネルが宣戦布告!】

【セミナー会計・早瀬ユウカの黒い噂! 魅惑の太ももで先生を操るあざと力!】

【メイド部が離反? 冷酷な算術使いに勝算ゼロ!? ミレニウムを揺るがす抗争勃発!】

【ミレニウムに激震が走る! シャーレの先生を巡る仁義なき戦い!】

文面を眺めるネルの表情に驚きはない。ある意味では予想通り。虚実が入り混じる煽り文句を次から次によく思いつくな、と馬鹿馬鹿しさを覚えて呆れるくらいだった。

ユウカに視線を戻して両肩を竦める。

「説明もへったくれもねえよ。書いてあんだろ？」

「ま、まさか! 本当にクーデターを起こすつもり!?」



「それは違うと思いますよ。ユウカちゃん」

「えっ？」

ひょいっと左から伸びた手が、ユウカの掲げた記事を取り上げる。いつの間に來たのか、白を基調とした制服に、ミレニアムのアウタージャケットを羽織る少女がいた。

生塩ノア。セミナーで書記を務める役員だ。

紫がかった瞳で内容を速読するノアは、足首まで届くほどのロングヘアで、その髪色は新雪のごとく真っ白だった。数秒で読み終えると、動揺するユウカに微笑みを向ける。

「誇張された煽り文句に騙されてはダメですよ？ はい、お返ししますね」

彼女は物言いたげなユウカに記事を渡してネルへと向き直った。

「特別条項を申請されたんですね。ネル先輩」

「なんだよ。文句あんのか？」

ノアは眉をひそめるユウカに視線をやると、

「通称『キヴォトス決闘法』と呼ばれる制度です。当事者か代理人の決闘で紛争の終結を図る手段の一つですね。これは連邦生徒会規則の別則にも載っていますよ」

「……聞き覚えがあるわね。でも、使われた事例はないはずよ？」

「その通りです。この法制度が適用されるケースは、学園や組織の紛争が対象ですからね。

個人間の揉め事は対象外です。でも、ネル先輩の申請は正式に受理されていますね」

ユウカの顔から血の気が引いた。

「やっぱりC&Cのクーデター……」

「ふふっ、まだそうとは決まっていますせんよ？ 考えてみてください。もしも、ネル先輩とC&Cが本気なら、校舎の半分はもう更地になっているはずですよ。そうですね？」

「控えめにやればな」

「なるほど。被害規模を全壊に訂正しておきますね」

「そういう問題じゃないわよ!？」

眉間にしわを寄せ、ユウカは険しい表情でネルに詰め寄った。

「ちゃんと説明してください！ 何が目的ですか！」

「決まってるだろ。シャーレ当番だ」

射るような眼差しでユウカを怯ませる。

「てめえに先生は任せておけねえな。早瀬ユウカ」

「先生を？」

心当たりを思い出したユウカが、げんなりした顔で額に手を当てる。

「……そういうことね。あの、ネル先輩？ この前の件は——」

「あたしが勝ったら、C & Cで当番を独占する。先生の専属メイドだ」

「えッ」

その場で凍りついたユウカに代わって、目を丸くしたノアが訊いた。

「専属ですか？ 先生の？」

「おう。あたしから先生の仕事から生活まで世話してやるよ」

「負けたときはどうするんですか？」

「はっ、あたしに勝てんのか？ お前らセミナーの事務屋が？」

「部長？ そういう態度はよくありませんよ？」

やんわりと諫めてから、アカネはユウカに視線を投げる。

「これまでの任務で発生した修繕費用、C & Cで全額弁済するのはいかがですか？」

「全額っ!? 冗談よね？ ほんと払える金額じゃないわよ!?」

アカネは眼鏡のつるを指で押し上げた。夕陽の反射でレンズがきらりと光る。

「……C & Cのメイドカフェ。利益率はよく知ってますよね？」

C & Cは期間限定でメイドカフェをした過去がある。たった一度で期間が短かったにもかかわらず、叩き出された売上と利益率は、ユウカを唸らせるほど高かった。

ミレニアムの財政を担う会計の顔で愛用の電卓を弾いた。

「そ、そうね。まあ確かにそれなら……」

「ユウカちゃん？ ちょっといいですか？」

ノアはそつと耳打ちする。彼女に何を吹き込まれているのか、ユウカの顔面はみるみる青ざめたかと思えば、あわあわとした様子で真っ赤になったりと忙しない。

咳払いをひとつ。ユウカがぐつと拳を握った。

「……ノア、間違ってたわ。やっぱり私が何とかしないと！」

「その意気ですよ、ユウカちゃん。私も手伝いますね」

「ありがとう。ノアがいれば心強いわ」

覚悟を決めた顔で振り向き、

「ネル先輩。その勝負受けて立ちます」

「……ハッ！ ちったあマシな顔になったな」

燃えるような夕陽に照らされる中、二人の視線が真っ向からぶつかる。

ネルは不敵な笑みを浮かべた。

「——勝負だ。早瀬ユウカ」

ネウオト又決闘事変!!

美甘ネル VS 早瀬エウカ

【発行日】

2025 年 12 月 30 日 初版発行

【発行者】

黒ねこ作（黒猫機関）

Email : projectblackcat2011@gmail.com

Twitter : (@gretelproject) pixiv ID: (13552389)

【イラスト】

しもうみ

Twitter : (@simoumi_217) pixiv ID: (68404738)

【装丁デザイン】

船木渡（FLOSHIKI DESIGN）

<https://floshiki.com>

【印刷・製本】

有限会社あかつき印刷

<https://www.akatsuki-insatsu.co.jp>

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製（コピー）することを禁止します。また、本作品は二次創作フィクションであり、実在する個人、団体、歴史、原作とは一切関係ありません。